

愛知の赤煉瓦(作品発表)

| | |
|-----|---|
| 著者 | 水野 信太郎 |
| 雑誌名 | 浅井学園大学短期大学部研究紀要 |
| 巻 | 44 |
| ページ | 185-191 |
| 発行年 | 2006-03-24 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1136/00000782/ |

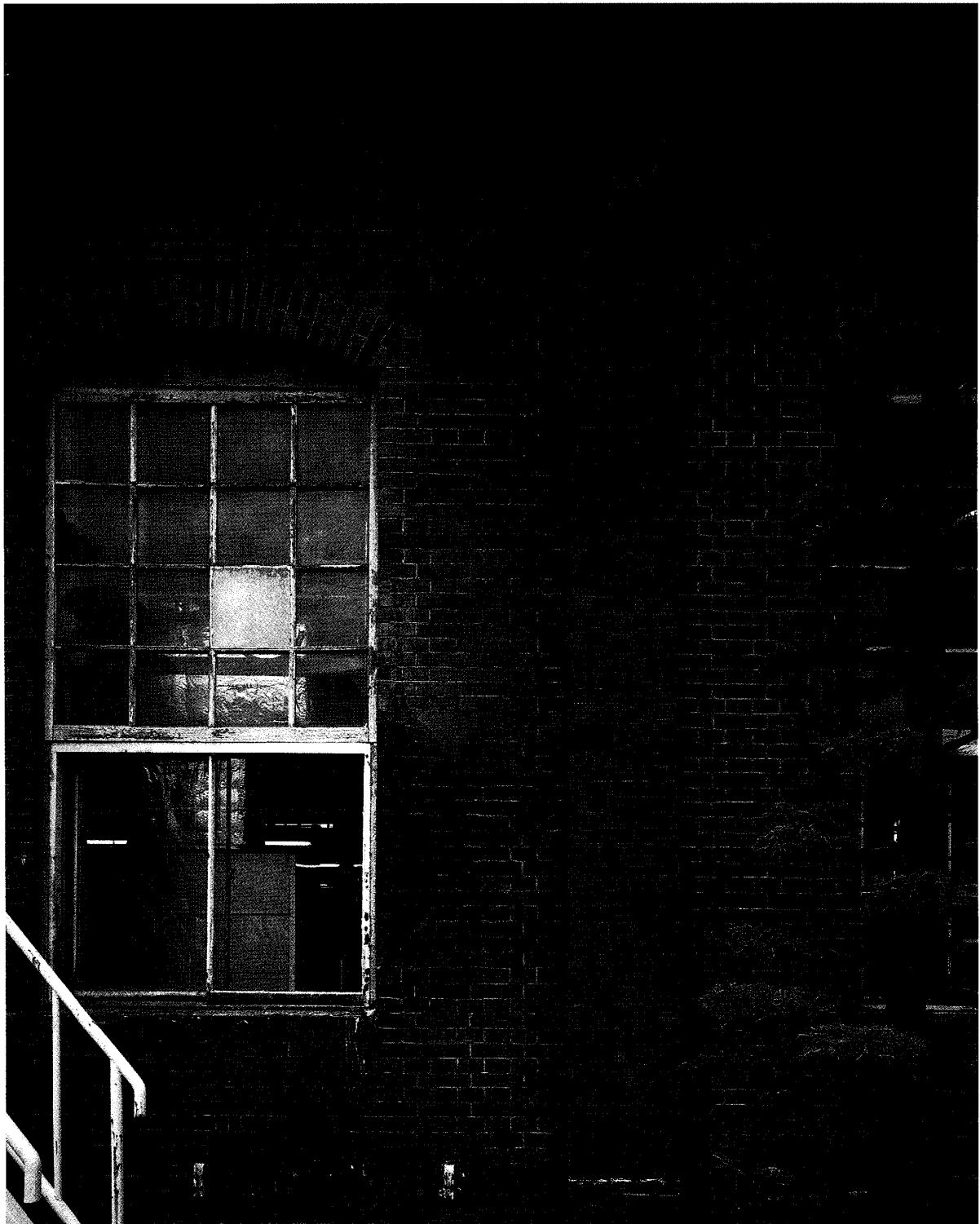
愛知の赤煉瓦

The Beautiful Unknown Old Brick Buildings of Aichi Prefecture in Japan

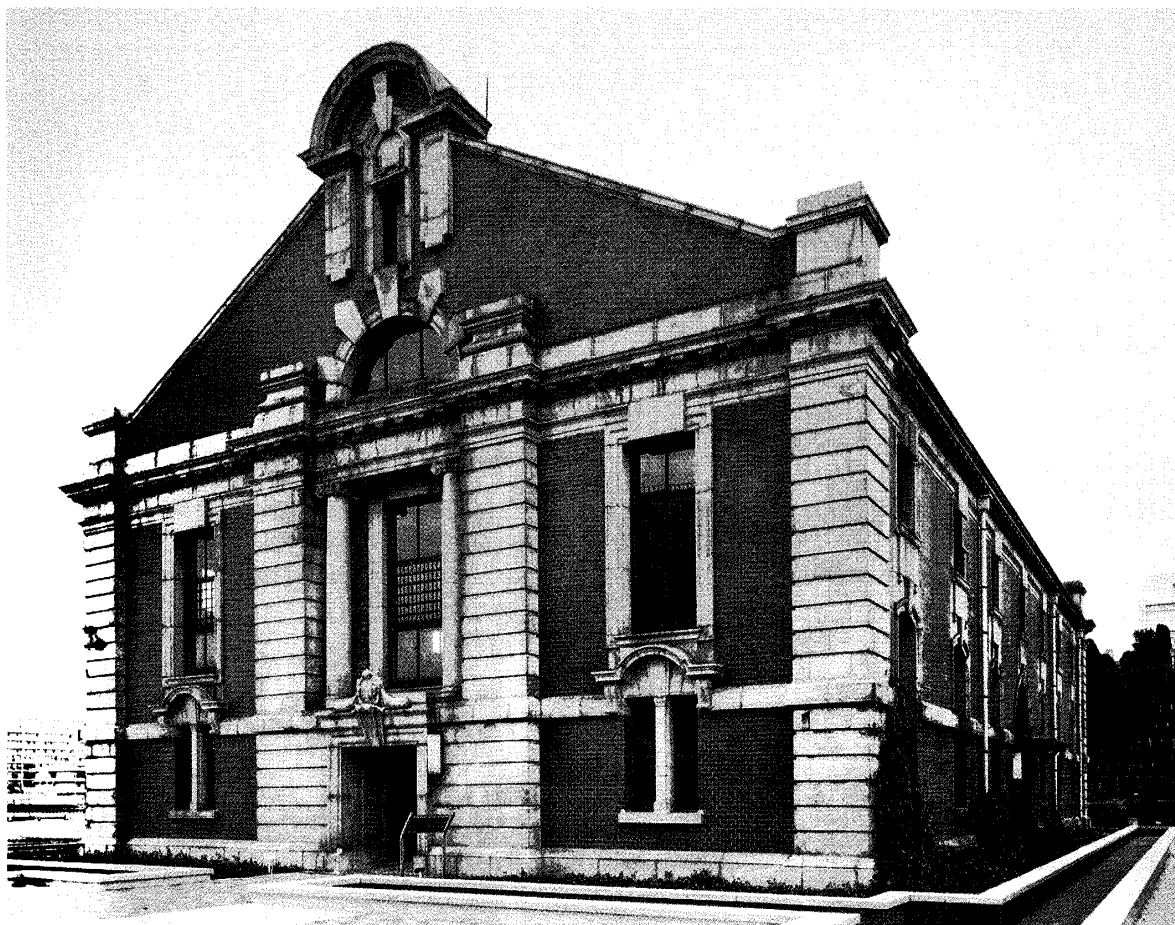
水 野 信 太 郎

Shintaro

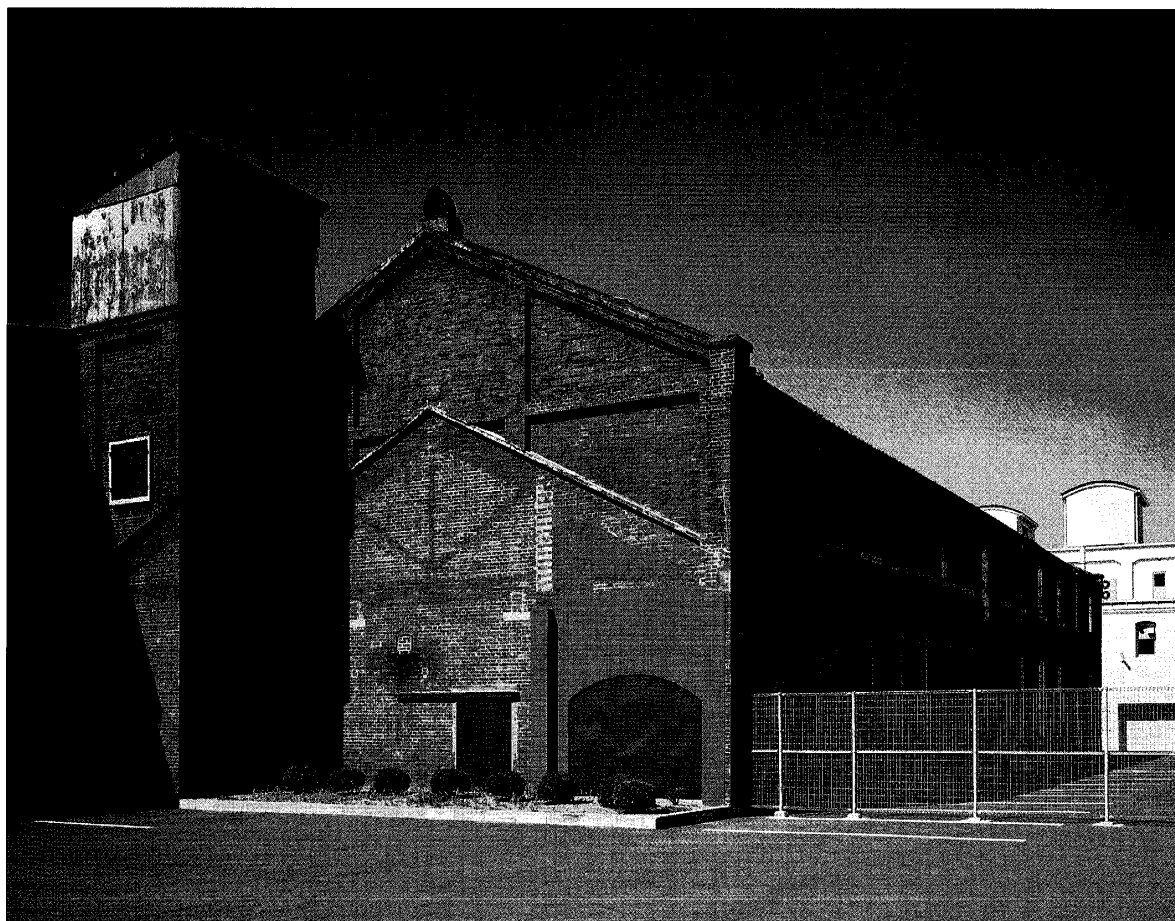
MIZUNO



作品－1 株式会社三五 名古屋工場外壁南面



作品－2 鍋屋上野浄水場旧ポンプ所（南西面）



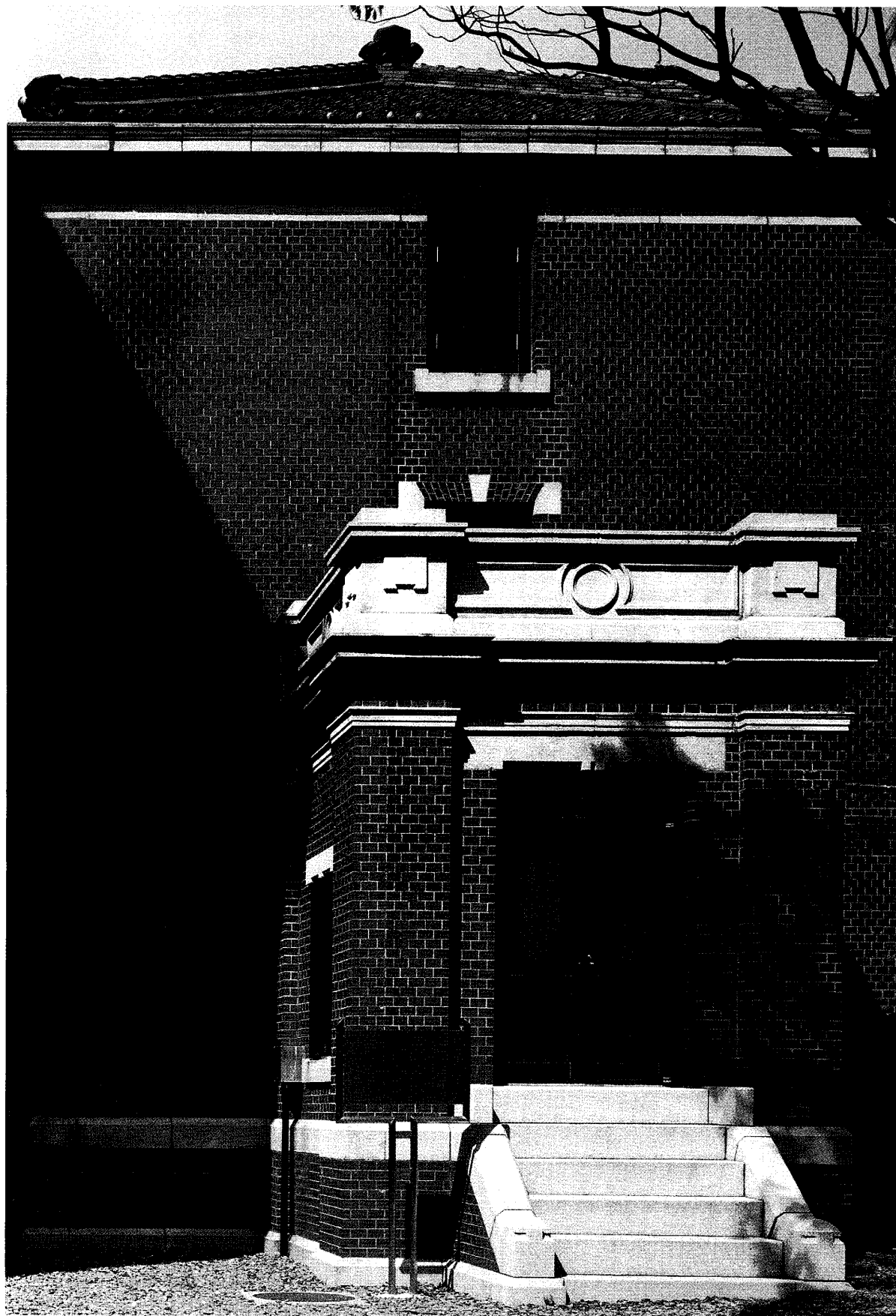
作品－3 ノリタケカンパニー製土工場（東面）



作品－4 東邦ガス名古屋製造所（外観北東面）



作品－5 カメレン旧西窯（室内・外観北東面）



作品－6 西尾市立図書館岩瀬文庫（南側正面）



作品－7　コンドーバン煉瓦座敷（外観北側面）



作品－8　豊橋の喫茶店「葡萄の木」（外正面）



作品－9 旧三河セメント徳利窯（外観北西面）



作品－10 鈴木煉瓦株式会社旧工場の外観正面

ここに発表する写真作品は、既に本学の各学部・研究所の研究紀要において研究成果を発表した論考に関連する内容である。赤煉瓦ネットワーク半田大会が開催された2005（平成17）年度と言うこの機会に歴史的な記録資料として投稿・掲載させていただく。

本稿のタイトルや文中における赤煉瓦あるいは赤煉瓦建築が意味するものは、建築物の外観に煉瓦の赤い色調を顕（あらわ）に見せた“赤煉瓦むき出し建築”のことである。したがって純粹の煉瓦造建築であっても、外装が煉瓦以外の石材や漆喰仕上などの建築物は“赤煉瓦”とはしない。むしろ逆に本稿では木造建築など煉瓦造以外の構造体を、素焼きの煉瓦あるいは煉瓦タイルで仕上げた建築作品も取り上げている。本稿は、上記のような意味を持つ“赤煉瓦”すなわち“赤煉瓦建築”の、外形だけでなく色彩という重要な情報をも盛り込んだ写真作品群である。なお本稿への登場が、おそらく最後の記録となろう作品も複数含まれている。

作品－1は名古屋市熱田区六野にあった工場建築である。自動車のマフラー（消音器）を製造する企業で、業績好調な折から写真のような姿をとどめることはできなかった。昨年度に解体されたときく。当建築は1917（大正6）年に竣工した。鍋屋上野浄水場（作品－2）は名古屋市の創設水道施設の旧第1ポンプ所である。このバロック調建築物は1914（大正3）年に完成し、現在は同施設群の記念碑的な存在となっている。写真の左方向が緩速濾過池となる。

作品－3ノリタケカンパニーは今日、ノリタケの森として整備された。建物の妻面には解体された部分の小屋組トラス跡が見える。右手奥の西隣棟も煉瓦造であるが、こちらは白い壁を上塗りして仕上げているので“赤煉瓦”とは気づいてもらえない。作品－4の東邦ガスは作品－1からほど近い場所の熱田区桜田町に建つ。1923（大正12）年ころ竣工の旧東邦瓦斯直立窯室（右遠方）ほかであるが、今は倉庫などとして使用される。

カメレン（作品－5）は赤煉瓦ネットワーク全国大会が開かれた半田の市内で、亀崎北浦町にて現業の歴史ある窯業会社である。カメレンとは旧亀崎煉瓦からの名称。この窯は1919（大正8）年に築かれた。1882（明治15）年の末頃から煉瓦を焼いたとされる西尾の地に、化粧小口煉瓦を施した岩瀬文庫（作品－6・1920年・大正9竣工）が残る。豊橋市南栄町の作品－7コンドール室内1階は畳敷きの和室である。完成したのは1924（大正13）年とされる。同市三輪町の喫茶店が作品－8。右側是新築物件で、左奥は大正期の木造建築を整備したという。

作品－7コンドール左側の前面道路・国道259号線を南へ進むと、田原市内に作品－9のような三河セメント工場跡地が開ける。徳利窯（ボトル・キルン）とは、その形状から名づけられた。石灰岩を砕いた粉に粘土を混ぜた原料を、この窯で焼いてセメントとした。鈴木煉瓦は安城市南町の工場（作品－10）で昨年度まで煉瓦を製造していた。同地が余りにも市街地化し過ぎたため、ここでの生産を諦めたその時点の姿である。その後、同社は同じく安城市内の岡田煉瓦製造所に煉瓦の製造を委託している。

参 考 文 献

『赤煉瓦アラカルト ―愛知―』全愛知県赤煉瓦工業協同組合「赤煉瓦アラカルト―愛知―」
編集委員会・水野信太郎、全愛知県赤煉瓦工業協同組合、平成17年（2005年）9月10日